

## 1-2 歳児は遊びからの離脱にどう反応するのか

—その後の遊び関係の変化に着目して—

岡南 愛梨\*

### How Does Toddler React When Their Peer Leaves from Their Play?

Focusing on what happens to the playing relationship

Airi OKANAMI

#### Abstract

This study reveals how 1-2-years-olds react when their peer leaves from the play that they were involved together, and how that reaction changes their playing relationship. Ethnographic research was carried out in a one-year-olds classroom in a children's center. Ten 1-2-years-olds were observed once a week for three months. Their peer-interaction in play was video recorded with iPad using an observation application. The result was categorized, and two specific cases were examined with microscopic analysis. 31 out of 65 reactions were interactions trying to bring the leaving child back to their play. 1-2-years-olds are found to use various types of strategies more than children over 3 years old. The findings suggest that even 1-2-years-olds try to sustain their play by attempting to continue the interaction with the others, looking for the right moment and exercising ingenuity. The findings also suggest that the playing relationship continues more when the child tries to harmonize the play context with the new context that the other child started.

**Keywords:** toddlers, play, interaction, peer relationship, ECEC

## 1 問題と目的

### 1.1 問題の所在

保育所保育指針の保育内容「人間関係」にあるように、他者とのかかわりは保育において欠かせない要素である。他者とは、養育者や保育者はもちろん、生活をともにする近い年齢の仲間をも含む。仲間とのかかわりが大人とのかかわりと違う点として、子どもは相手を自主的に選べ、時にはすぐには受容されない経験もし、自らを良い遊び相手として説得する必要もあることが挙げられる (Corsaro, 1985)。これまで、人間関係や仲間関係が始まる時期として幼稚園入園時期である3歳児が注目され、複数の視点から子ども同士のかかわりや仲間関係の始まりについて研究されてきた (野尻, 2000; 松丸, 吉川, 2009 等)。しかし、働きに出る女性の増加に伴い、現在では1-2歳児の47%が保育施設を利用している (厚生労働省, 2018)。保育施設によってクラスサイズは様々であるが、3歳になる前から他児とのかかわりを継続的に経験する

---

キーワード: 1-2 歳児、遊び、かかわり合い、仲間関係、保育

\* お茶の水女子大学大学院博士前期課程

子どもが増えているのである。1 歳児保育では特に月齢による発達差が顕著にあり、これは保育者の語る 1 歳児保育の特徴のひとつとして指摘されている（古賀, 2011）。つまり 1 歳児クラスでは、言葉をよく話す子と身体的動作によって思いを伝える子など、様々な発達段階にいる子どもたちがともに生活をする。また、仲間とのかかわり方には乳児のうちからかなりの個人差が見られることも指摘されている（布施, 1984）。1 歳児クラスの子ども同士遊びには、3 歳以上児とは異なるかかわり合いの多様性があると言えるだろう。そのため、1 歳児クラスの子ども同士が、かかわりの歴史をもつ集団の中で、どのように他者とかかわり合いながら遊びを続けているのかについて着目することは、1 歳児保育の特質を明らかにする上で意義がある。本研究では、遊びからの離脱が起こる時に着目することで、1 歳児保育において子ども同士で行われる遊びがどのように持続するのかについて検討する。

## 1.2 先行研究

3-6 歳児を対象とした仲間との遊びに関する研究は多数存在する（松井, 2001; 岩田, 2011 等）。高櫻（2006）は、国内における仲間関係に関する論文をレビューし、仲間との遊びについて、「幼児は言語や非言語など様々なコミュニケーション手段を使用し、一緒に遊ぶ経験を重ねる中で他者との関係を築くと同時に、その関係の中でその場における相互作用に適した言葉や方略を学び、さらに遊びを発展させていく」

（p.265）と述べる。つまり、幼児の遊びの持続と発展は、それまでに築き上げてきた関係性の中で、両者の働きかけによって複雑になされる。小山（1998）は、子どもたちの間で遊びの意識が強く保持されている時は、異なる文脈が入り込んだ際にも、遊び状況を維持することができることを示唆している。

一方で、日本の保育施設での 1 歳児クラスの子ども同士の遊びの持続や発展に着目した研究は少ない。Parten（1932）の遊びの分類によれば、1-2 歳児は「一人遊び」や「傍観」が多い時期と考えられている。しかし近年、課題や指標を非言語的に提示すれば 2 歳児でも誤信念課題に通過することが示され（Southgate, Senju, & Csibra, 2007）、佐伯（2017）も、かかわりの中では、乳児であっても他者の意図をもてあそぶことがあると指摘している。スウェーデンの保育施設において 1 歳児のやりとりとコミュニケーションの豊かさを示した Engdahl（2011）は、1 歳児が仲間との間で遊びを続けるために交渉の方略を用いることを事例から示した。1-2 歳児のコンピテンシーが見直されてきた今、日本の保育施設において 1-2 歳児は仲間とどのように遊びを持続させているのかについて、従来の遊びの分類に捉われず検討する必要がある。

3 歳未満児の他者とかかわりについて、実験者に対して見せる要求伝達手段に着目した木下（2008）は、1 歳代の相互交渉は他者の提示するやりとりのパターンに依拠しているとした。さらに 2 歳前半においては、自他の視点がまだ明確に区別されきれておらず、混同したコミュニケーションになることがあるとした。瀬野（2012）も 2 歳児について述べているように、1-2 歳児のかかわり合いにおいては、自他がはっきりと区別されない心地よさがコミュニケーションの基盤にあると考えられる。瀬野（2010）は、2 歳児の遊び場面を観察し、特に年度の中盤においては、仲間同士での遊びが生まれる際に「相互模倣」や「繰り返し」によって通じ合う共有の基盤が目指されることを示した。3 歳未満児が他児に対して用いる行為として模倣がよく取り上げられるが（淀川, 2010; 大桑, 2012; 名和, 2015 等）、1-2 歳児の模倣以外の他児への働きかけについてはあまり検討されておらず、1-2 歳児同士の遊びがどのように持続するのかについては研究が充分でない。また、0-2 歳児の保育場面における音楽的行為に着目した岡林（2003）は、「かーわって」「いいよ」などの応答唱が他者と呼吸を合わせる心地よさを感じる場面となっていることを明らかにし、さらにそこに見られる「適度なずれ」が子どもたちの行為を持続させているのではないかと考察をしている。もちろん、適度なずれには何かしらの応答や対応が行われないと、行為の持続にはつながらない。このことから、子ども同士の遊びにおいても、ずれを感じるような瞬間が、遊びを持続させる可能性が考えられる。

## 1.3 本研究の目的

先行研究をふまえ、本研究の目的は、1-2歳児同士の遊び場面において、遊び意識にずれが生じた際に子どもはどのような対応をとり、それが遊び関係をどう変化させるのかを明らかにすることである。具体的には、まず、ともに遊んでいた子どもが突然それまでの遊びから離脱してしまったように見える時、ともに遊んでいた他児はどのような反応をするのかを明らかにする。次に、離脱に対する他児の反応のあと、それまでの遊び関係はどのように変化したのかについて明らかにする。最後に、遊びからの離脱があったのにもかかわらず遊びが持続した事例について、そこに見られる子どものかかわり方について検討する。

## 2 方法

### 2.1 観察の概要

都内のA認定こども園の1歳児クラスにおいて、参与観察を行った。対象となった子どもは10名であり、観察開始時の子どもたちの月齢は、1歳9ヶ月から2歳6ヶ月であった。1-2歳児は、明確な発話が少なく、表情や身体を使ったコミュニケーションも多い。言葉だけでなく、身体の動きや表情など細かいところまで記録にとり考慮することが必要であるため、観察のために開発されたiPad用のビデオアプリケーションCAVScene(©お茶の水女子大学)を用いて撮影を行った。主に子ども同士のかかわりが発生した際に、アプリケーション上の録画データにビデオクリップを作成した。観察終了後にCAVScene上にメモなどの書き込みを行い、それを電子フィールドノーツとした。

観察の立場は、観察に徹する「消極的な参与」(柴山, 2010)とした。観察者として参加する前に、定期的にボランティアとして保育者や子どもたちと関わりながら保育に参加し、観察者を知ってもらう段階をとった。観察を始めてからも、子どもたちの自然な動き、保育者の動きなどフィールドの様子に十分配慮をし、子どもから求められてきた時にはかかわるなどして子どもとの関係性も意識した。201X年10月から観察を開始したが、今回はCAVSceneによる撮影を開始した201X年12月以降の事例のみを分析の対象とする。週に1度決まった曜日に、朝の8時ごろから11時まで観察を行なった。201X年12月から201X+1年2月まで、計12回の観察を行った。なお、お茶の水女子大学人文社会科学研究所の倫理審査委員会による倫理審査を受け承認を得た(受付番号2018-97)。

### 2.2 分析方法

本研究では、遊びからの離脱に対する1-2歳児の反応に着目するため、1-2歳児同士がかかわり合っている遊び場面において、どちらか一方の子どもからの遊びからの離脱が含まれているクリップを、分析の対象とした。本研究において1-2歳児同士がかかわり合っている遊び場面とは、「①保育者の積極的な関与無しに遊びが展開されており、②物の介在や子ども同士での対話、視線、表情などから、少なくともどちらか一方が明らかに一緒に遊んでいることを認識していると見られる場面」とした。Parten(1932)の分類では傍観的行動や平行遊びに位置付けられるような遊びの中にも、他児とかかわるような仕草や他児への気持ちや表情などから伺えるものは、かかわり合っている遊び場面と判断した。「遊びの文脈に沿わずにその遊びから離れたように見える行為・違う遊びを始めたように見える行為」があった時に、遊びからの離脱があったと判断した。本研究では、便宜上、遊びから離脱した子どものことを離脱児と呼ぶ。今回は、遊びからの離脱が見られた際の他児の反応に着目したため、離脱児にとっては離脱を意図した行為でなくとも、他者からそのように見えたものは離脱として考える。同じ離脱に対して他児がいくつかの反応をした場合はそれぞれを別の反応として数えるが、一連の流れとして見られた行動は複数の行動で一つの反応として判断する。まず、対象としたクリップについて、見られた反応の種類に着目した。次に、遊びの離脱を受けて子ども同士の遊び関係がどう変化したのかについて検討した。最後に、他児の反応によって遊び関係が復活したと見られる事例を取り上げ、微視的に分析した。

### 3 結果及び考察

#### 3.1 遊びの離脱に対する他児の反応

1-2 歳児同士がかかわり合っている遊び場面において遊びからの離脱が一回以上含まれているクリップは、38 クリップあった。遊び場面は、主に 2 名によるものが多かったが、一部 3 名以上の遊びも含まれた。確認された遊びからの離脱と、それに対する他児の反応は、計 65 回観察された。65 回の他児の反応は、「A それまでの遊びを続ける」「B それまでの遊びをやめる」「C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる」という 3 つの大きなカテゴリーに分類された。「A それまでの遊びを続ける」という反応は、「A-1 離脱したことを気にしない」と「A-2 確認する」という 2 つの下位カテゴリーに分類された。「B それまでの遊びをやめる」という反応は、「B-1 何もしない」「B-2 離脱児についていく」「B-3 新しい遊びを始める」の 3 つの下位カテゴリーに分類された。「C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる」という離脱児への働きかけが見られる反応については、松井（2001）の幼稚園における仲間への働きかけ方略カテゴリーを参考に、「C-3 模倣する」「C-4 言葉を用いて明示的に誘う」「C-5 暗黙的に誘う」という下位カテゴリーを作成した。ただし、本研究で対象とした 1-2 歳児は身振りによる働きかけも行うため、「暗黙的に誘う」には、身体的動作など言葉を使用しない働きかけも含めた。さらに、本研究では、1-2 歳児の働きかけ行為として新たに見出された「C-1 物理的に連れ戻そうとする」というカテゴリーと、暗黙的に遊びに誘っているとまでは言えない無意味な発声など「C-2 気を引こうとする」というカテゴリー、単にそれまでの遊び内容へ離脱児を連れ戻そうとするのではなく、離脱児が新しく始めた遊びをそれまでの遊びに取り入れようとする「C-6 相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」というカテゴリーを加え、反応を計 6 つの下位カテゴリーに分類した。反応のカテゴリーと各反応の数を表に示した（表 1）。

表 1. 遊びの離脱に対する反応

上位カテゴリー	反応数	下位カテゴリー	反応数	内容・例
A それまでの遊びを続ける	24	A-1 離脱したことを気にしない	15	遊びから離脱したことを気にする様子を見せない。
		A-2 確認する	9	離脱したこと目を見て確認する。
B それまでの遊びをやめる	10	B-1 何もしない	3	ぼーっとする。棒立ちになる。
		B-2 離脱児についていく	3	離脱児と同じ遊びを始めたり、同じ場所へ向かう。
		B-3 新しい遊びを始める	4	離脱児とは違う新しい遊びを始める。
		C-1 物理的に連れ戻そうとする	3	腕を引っ張るなど、離脱児の身体を連れ戻そうとする。
C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる	31	C-2 気を引こうとする	6	言葉にならない声を発する。わざと大きな声で話す。
		C-3 模倣する	3	相手と同じ動作をする。
		C-4 言葉を用いて明示的に誘う	7	「一緒に遊ぼう」などの明示的な言葉で誘う。
		C-5 暗黙的に誘う	8	「じゃあ先に食べちゃうよ？」など暗黙的な言葉による誘いや、相手の使っている玩具を一部片付けるなど。
		C-6 相手の始めた遊び文脈との融合を目指す	4	離脱児の始めた新しい遊びを、それまでの遊びに取り入れようとする。

表 1 に示したように、大きなカテゴリー区分でみると、「A それまでの遊びを続ける」は 24 回、「B それまでの遊びをやめる」は 10 回、「C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる」は 31 回観察された。他児による遊びの離脱があったのにもかかわらず、それまでの遊びが一人もしくは残された子どもたちだけで持続することが 65 回中 24 回あったことから、1-2 歳児が他児とのかかわりよりも遊び内容を優先する場面があることが確認された。見られた反応として最も多かったのは、離脱したことに対して目もやらず、それまでの遊びを続けるという反応だった（ $n=15$ ）。ただし、これは、ビデオクリップから直後の他児による反応が確認できなかった数であるため、例えば、「遊びに熱中しながらも視界の隅で離脱したことを捉え、しばらくしてから離脱児のもとへアプローチしに行くような反応」について検討できていないことは留意すべき点である。

一方で、残りの 41 回は、他児の遊びからの離脱を受け、子どもの遊びに明らかな影響が見られた。「B それまでの遊びをやめる」では遊びをやめ「何もしない」反応（ $n=3$ ）や、「新しい遊びを始める」反応（ $n=4$ ）が見られたこと

から、離脱児の存在がそれまでの遊びの存続において不可欠な存在である場面があったことが伺える。

また、離脱児につられるようにして、同じ遊びを始めた同じ場所へ向かうような反応も3回見られた。1-2歳児は、遊び内容よりも、他児とのかかわりを優先するという選択をとる場合もあることがわかる。しかし、それと比べて「C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる」反応は31回あったことから、1-2歳児の遊びにおいては、他の子どもの行動に影響されてもおお、それまでの遊びを持続させようとする姿が多く見られることが明らかになった。

「C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる」反応は、6つのカテゴリーに分類された。中でも、「言葉を用いて明示的に遊びに誘う」反応（n=7）と、「暗黙的に誘う」反応（n=8）は比較的多く見られ、松井（2001）などで示されている幼稚園以降に見られる他児への働きかけ方略は、1-2歳児の間でも用いられることがわかった。その次に多かったのは、「気を引こうとする」反応（n=6）であり、具体的には、意味の無い言葉を発したり、わざと大きな声で絵本を読み始めたりなどが見られた。他児の身体を引っ張ったりする「物理的に連れ戻そうとする」反応（n=3）も確認された。これらは、相手への気持ちが直接行動に現れているような反応と見て取れる。「模倣する」反応（n=3）も見られた。模倣は1-2歳児によく見られる行為であり、コミュニケーションの機能を果たして仲間入りのきっかけとなることがあるが（大桑, 2012）、本研究では仲間を誘う際にも使用されることが示唆された。「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応は4回確認された。相手の始めた遊び文脈との融合を目指すためには、相手の意図に寄り添いながら自分の意図を伝えるということが必要となる。1-2歳児がどのようにそれを行なっているのかについては、3.3事例の微視的な分析にて検討する。

### 3.2 遊びからの離脱による子どもたちの遊び関係の変化

遊びからの離脱があった際に、他児の反応の後、子どもたちの関係性はどうなったのかについて調べた。その結果、離脱児との遊び関係が「続く」場合と「途切れる」場合に分類することができた（表2）。

表2. 遊びの離脱に対する反応とその後の遊び関係

上位カテゴリー	下位カテゴリー	反応数	遊び関係が 続く	遊び関係が 途切れる
A それまでの遊びを続ける	A-1 離脱したことを気にしない	15	0	15
	A-2 確認する	9	0	9
	計	21	0	21
B それまでの遊びをやめる	B-1 何もしない	3	0	3
	B-2 離脱児についていく	3	3	0
	B-3 新しい遊びを始める	4	0	4
	計	10	3	7
C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる	C-1 物理的に連れ戻そうとする	3	0	3
	C-2 気を引こうとする	6	1	5
	C-3 模倣する	3	0	3
	C-4 言葉を用いて明示的に誘う	7	2	5
	C-5 暗黙的に誘う	8	2	6
	C-6 相手の始めた遊び文脈との融合を目指す	4	4	0
	計	31	9	22

「A それまでの遊びを続ける」反応（n=21）、「B-1 何もしない」反応（n=3）、「B-3 新しい遊びを始める」反応（n=4）のあとには、離脱児と他児との間にあった遊び関係が途切れていた。「B-2 離脱児についていく」反応（n=3）の後には、遊び内容は変わったが、二人の遊び関係は続いていた。

「C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる」反応においては、下位カテゴリーによってその後の遊び関係に違いが見られた。「C-1 物理的に連れ戻そうとする」反応（n=3）や「C-3 模倣する」反応（n=3）の後には、全ての場合において遊び関係が途切れていることがわかった。これらの反応は、遊びに連れ戻すための働きかけとしては有効ではないことが示唆された。「C-2 気を引こうとする」反応（n=6）においても、離脱児と他児が再び遊び関係を復活させたのは1度のみであった。発声などによって離脱児

の注意を引きつけることができて、その後の遊び関係へとつながることは少ないことがわかった。「C-4 言葉を用いて明示的に誘う」反応においては 7 回中の 2 回、「C-5 暗黙的に誘う」反応においては 8 回中の 2 回、反応の後に離脱児と他児の間に遊び関係が復活していた。「C-6 相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応においては、全 4 回において、離脱児と他児の間で遊び関係が復活していたことがわかった。自分の活動へ相手を誘う場面に用いられる方略について 2-6 歳を対象に検討した藤田（2016）は、相手が自分の遊びに集中している時には方略は成功しにくいため、相手を誘い入れるタイミングを考慮する必要があることの可能性を示唆している。一方的な方略（C-1 や C-2）のあとには遊び関係が途切れやすく、相手の遊び文脈を考慮した方略（C-6）のあとには遊び関係が復活しやすいという本結果から、1 歳児においても藤田（2016）と同じことが言えることがわかった。

なお、「C それまでの遊びへ離脱児を連れ戻そうと試みる」反応によって遊び関係が途切れた場合であっても、さらなる働きかけによって、遊び関係が復活することがあった。そのため、反応の直後の遊び関係が途切れたままだったとしても、その反応が遊び関係の持続に全くの無意味だったかということ、そうとは言いきれない。次に、具体的な遊びの事例の中で他児による反応について検討する。

### 3.3 遊び関係を復活させた反応を含む事例の分析

遊びからの離脱があった際に遊び関係を復活させた他児の反応を含む事例について、具体的ななかかわりを検討するために、クリップに記録された事例を徹底的に分析する。遊びからの離脱に対して他児が多様な反応を行っていた事例と、3.2 の結果から特に遊び関係が復活しやすいことがわかった「C-6 相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応がはっきりと見られた事例の、2 つを分析する。

#### 3.3.1 遊びからの離脱に対して特に多様な反応が見られた事例

遊びからの離脱に対して特に多様な反応が見られた事例として、タカとエミのかかわり遊びの一部分を【事例 1】として取り上げる。この事例では、タカは一人で電車遊びをしているが、同時にエミとのかかわり遊びも楽しむ様子が見られる。今回は、エミとタカのかかわり遊びを、「2.2 分析方法」で説明したかかわり合っている遊び場面としてとらえ、一緒に遊んでいる遊びと考える。徹底的な分析により、この事例では「遊びからの離脱→他児による反応→関係性の変化」という流れが、何度も繰り返される様子が見えてきた。他児による反応として見られたのは、「C-2 気を引こうとする」が 1 回、「C-3 模倣する」が 2 回、「C-5 暗黙的に誘う」が 2 回であった。各反応は、事例の中で番号とともに太字で示した。

##### 【事例 1】 いっしょに遊びたい

**それまでの経緯：**電車遊びが好きで、言葉が達者なタカ（2 歳 9 ヶ月）が、直線の線路の上に電車を長く繋げ、前後に走らせて遊んでいる。発話がまだ不明瞭なエミ（2 歳 1 ヶ月）は、タカと線路を挟んで向かい合って座り、タカから分けてもらった一台の黄色の電車を持っている。エミとタカは時おり目を合わせ、かかわり合いによる遊びを楽しむ。以下は、二人が「はしりたくない」という単語の音を楽しむようなやりとりを、お互いの言い方を真似しながら 3 回ほど繰り返し言い合って楽しんだあとのことである。

<離脱しようとするタカに対しエミが気を引こうとする>

0:29	エミとタカは同じ方向を向いて、離れたところでなされている保育者と他児の遊びを眺めている。
0:36	ずっと電車に手を置いていたタカだが、背後を向く際に手を離れた。エミはこれに気付きタカの電車に目をやる。
0:39	<b>エミが「ぶつがあーりちゃっやい！」と言って、自分の持っていた電車を振りかざしてタカの連なった電車に当てる。(C-2)</b>
0:42	少し曲がってしまった電車をじっと見て、エミが片手で曲がった電車をなおす。
0:46	エミが電車から手を離そうとした瞬間に、タカがエミの方を向く。タカはとっさに自分の電車に手を乗せ、エミのことを下から睨む。

ずっと自分の電車に手を置いていたタカがその手を電車から離すと、それに反応するかのように、エミ

はタカの電車を見て、3秒後、擬音語のような発話とともに自分の電車を振りかざしてタカの連なった電車の一部を壊す。タカからの反応を求めるようなその発話と動作はタカには気づかれず、エミが壊れた電車を修復しているところでタカに気づかれ、タカの電車に勝手に触ったことについてタカはエミを睨む。

0:36 下線部のタカの動作は、エミにとって「エミとのかかわり遊びからの離脱」のように見られたのだと考えられる。0:39 にて、タカの気を引こうとするかのような発話と動作をエミが行った。微細な他児の動きに反応し、「気を引こうとする」働きかけによって、タカとの遊びを続けようと試みるエミの姿が見られたと考えられる。

# <遊び文脈を行き来するタカと、多様に働きかけを試みるエミ>

0:49	エミがにやりとした笑顔を向けるが、タカはまた電車と目線を合わせるように横になり「ぶぶぶぶー」と言いながら電車を走らせる。
0:51	<b>エミは「きゃ〜」と言いながら、笑顔でタカと同じ姿勢になる。</b> <b>エミは「びびびび…」と高い声を出し、タカを見ながら自分の電車を線路と平行に動かす。(C-3)</b>
0:59	エミが座り直す。「トーマスがめちゃくちゃはしるぞお、びゅびゅびゅーん！」とタカが言いながら電車を動かすと、 <b>エミもすぐあとに「びゅびゅびゅーん！」と言って電車をタカと同じ方向へしゅーっと床に滑らせる。(C-3)</b>
1:05	一瞬間を置いてから、 <b>エミが「きゃ〜ははは」と声を出して笑う。手を叩き、足をばたばたさせ大げさに喜びを表現する。(C-5)</b> タカがエミを見る。
1:07	タカもエミのように座り、「きゃ〜！」と声を出して足と手をバタバタとさせる。 エミは電車をまた手に取りに行こうとしたが、タカを見てまた「きゃ〜」と言って手足を動かす。二人は目を見て笑いあっている。
1:13	エミは、さっと自分の電車を取る。タカは再び寝転び、自分の電車を動かし始める。
1:16	エミは「エミちゃん走りたくない！」と言い、電車をまたしゅーっと滑らせ、「きゃ〜〜！」と手足を動かす。
1:19	<u>今度はタカは真似せず、「トーマスがめちゃくちゃ走るよ」と言って自分の電車を走らせる。</u>

ここでは、タカが、一人で行っている「電車遊び」と「エミとのかかわり合いによる遊び」という二つの遊び文脈を行き来していることに着目したい。0:49 では、エミがタカに笑顔を向けるが、タカはエミから目を逸らし、自分の電車を走らせて「電車遊び」を優先する。このタカの「エミとのかかわり合いによる遊びからの離脱」を受け、エミは0:51 において、タカの姿勢と動作を模倣することによって、タカをかかわり遊びへ連れ戻そうと試みる。しかしタカはエミには反応せず「トーマスがめちゃくちゃはしるぞお、びゅびゅびゅーん！」と言って「電車遊び」を楽しんでおり、二人の遊び関係は途切れたままとなった。0:59 では、またエミがタカの言動を模倣し、「びゅびゅびゅーん！」と言って電車を滑らせる。これに対してタカは電車を見つめて反応しない。するとすぐさま、エミは笑いながら手と足を動かして大げさな動作を見せる。これは、少し前に同じ言葉の言い合いなどで共振した経験があったことから、タカを再びかかわり遊びに暗黙的に誘っているのだと考えられる。タカは、エミの動作に目を向けると2秒後、座り直してエミと同じ体制になり、笑いながら同じ声を発して、同じ動作を楽しむ。1:13 でエミは二人のかかわり遊びを発展させようとするかのように「はしりたくない！」→「電車を滑らせる」→「きゃ〜〜！」という一連のかかわりをタカと共有しようと試みる。しかし、1:19 下線部にて、タカは「トーマスがめちゃくちゃ走るよ」と言って再び「エミとのかかわり遊び」から離脱し、「電車遊び」へと戻っていった様子が見られた。鈴木（2013）は、模倣からかかわりの端緒を得ることで、同じ発話や同じ行為をしながら同調を楽しむ姿を3歳児にて観察している。ここでは、1-2歳児であっても、模倣という手段を用いて同調へと誘うエミの姿が観察された。

事例の微視的な検討から、2つの遊び文脈を行き来しているタカの姿が見えてきた。そして、タカがエミとの遊び文脈から離脱するたびに、献身的に自分との遊び文脈へと連れ戻そうと試みるエミの姿が明らかとなった。二人の遊び関係が復活した際には、エミによる直前の働きかけが有効だったことももちろん考えられるが、それまでにはエミが何度も働きかけの種類を変えながら繰り返し試みる姿があったことにも着目すべきであるだろう。反応ごとに着目すると、模倣することは遊び関係を復活させる上で有効でないという結果が3.2では見られたが、模倣によって他の遊び文脈に寄り添おうとする姿勢を見せたことで、その次の働きかけが成功したとも考えられることがわかった。これは、C-6「相手の始めた遊び文脈との融

合を目指す」反応へと繋がっていくような、相手の遊び文脈を考慮するような働きかけであったと考えられる。二人のかかわり遊びにおいては、歳下のエミによる遊びを続けようとする細やかな誘いが、遊びの持続を支えていることが示唆された。

### 3.3.2 「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応が見られた事例

次に、「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応が見られた事例として、ヒロとケンのごみ収集車遊びの事例を取り上げる。ここで見られた「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応は、太字で示したヒロの行動から成る一連の流れを1回として数えた。

#### 【事例2】ゴミ収集車

**それまでの経緯：**言葉が達者なヒロ（2歳5ヶ月）と、一語文で表現することが多いケン（1歳10ヶ月）が、ブロックの入った箱を二人で運ぶ。ヒロが箱を引っ張って方向を操作し、ケンには押している。ケンは保育者に「ピーポー車（救急車）」と言う。二人は一度奥の部屋のキッチンで停車したのち、それぞれ片手に食器を持ちながら片手で箱を動かし始める。うまく動かせることが嬉しいようで、ケンは周りの保育者に笑顔を向ける。箱を移動させながらヒロは「ゴミ収集車」と言い、ケンも「ゴミ、収集車」と答え、二人の押す箱はゴミ収集車であることが確認される。

#### <ケンが遊びから離脱する>

1:08	ヒロが「あつまだ落ちてた」と言い、箱から片手を離し、そばに落ちていたブロックを拾って箱に入れる。
1:11	ヒロが再び箱を移動させ始める前に、 <b>ケンが箱から手を離し、ヒロの横を通り過ぎて、ひとりで先に進む。</b>
1:14	ヒロはその様子を目で追いつながら手に持っていたお皿を箱に入れ、 <b>箱を押しながらケンを追いかける。</b>
1:23	<b>ヒロは「ちょっと、郵便車は」と言いながら、箱を押してケンを追いかける。</b> その声はケンには届かない。

ヒロがブロックを拾ったのを見て、ケンは何かを思いついたかのように、箱から手を離して一人先に進む。ケンのゴミ収集車遊びからの離脱を受け、ヒロはケンを追いかけて「ちょっと、郵便車は」と慌てた様子で言う。この際にはブロックの箱がゴミ収集車であったか郵便車であったかはあまり気にしていないようだった。

#### <ヒロがケンの元へたどり着く>

1:40	ケンは1歳児の部屋のキッチンに到着し、手にさきほどのコップを持ったまま、棚を物色している。 ヒロは箱を押して壁に付けるようにして駐車し、ケンのそばへ行く。
1:42	<b>ヒロは、2秒ほど身体を揺らしながらケンの様子を見る。</b>
1:48	<b>ヒロが隣の棚から深いお皿を取り出し、「これいる？…ゴミ収集車」と言いながら、箱に入れに行く。</b> ケンは棚に置いてあったペットボトルからコップに何かを注ぐふりをしており、ヒロの方は向かない。
1:54	ヒロは、ペットボトルを床に捨てるケンを見ながらも、後ろを通り過ぎ、奥の棚へ行く。

ヒロは箱を押しながらケンのもとへたどり着くと、棚を物色しているケンに近寄り、そばで体を揺らしながらケンとケンの物色している棚を見る。ヒロは、ケンの隣の棚からお皿を取り出して、「これいる？…ゴミ収集車」と言ってブロックの箱へと入れに行く。ケンの遊びからの離脱を受け、ヒロは1:14から1:48にかけて、①追いかけて、②呼びかけ、③そばでケンの意図を探ろうと観察し、④ケンのそばの玩具をゴミ収集車に入れることによって、「キッチンでのケンの遊び」と「それまでの二人のゴミ収集車遊び」を繋げようとする「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応を示した。

#### <ヒロがケンの遊び文脈に寄り添おうとする>



1:58	ヒロは棚からお茶碗をふたつ出して手に持つ。 ケンが立ち上がり、「はいどうぞ、はいどうぞ」と言いながら持っていたコップをヒロに差し出す。
2:02	ヒロはケンの差し出すとは逆のコップを受け取ろうとするが、ケンが離さないため、受け取るのをやめる。 ヒロは、「いない」「タカくんの飲んだから」と言いながら、持っていたお茶碗を箱に入れに行く。
2:05	<b>ヒロはケンにむきなおり、改めてコップを受け取る。</b>
2:10	ヒロは受け取ったコップをそのまま箱に入れる。ケンは、もうひとつのコップを飲むふりをする。
2:12	<b>ヒロはコップを飲むケンを見て、再び箱からコップを取り出す。</b>
2:14	ケンはコップを床に置き、頬を膨らませたまま、ヒロのコップに手を添えて飲むように促す。
2:16	<b>ヒロはコップを飲むふりをして、コップを箱に戻す。</b>
2:22	ヒロはケンが床に置いたコップも拾って箱の中へ入れる。ケンはヒロに軽く触れながら、箱の周りを回って反対側へ行く。
2:25	ケンが壁と箱の間に入り、箱を押す姿勢になる。ヒロも引く張る姿勢になり、「出発しんこーう」と言う。 ケンも「しんこー」と言う。二人は再び箱を一緒に押し始める。

ヒロの働きかけに対し、ケンからの明らかなかわりが見られたのは、1:58であり、自分の持っていたコップをヒロに差し出すという行動だった。ケンから渡されたコップをヒロは受け取ろうとするも、茶碗を手を持っていることもありうまく受け取れず、「タカくんの飲んだから」と理由付けて「いない」と伝える。しかしその後2:05に、ヒロは考えを改めるかのように、ケンに向き直りコップを受け取る。そしてヒロは、茶碗やお皿を入れたようにコップも箱に入れるのだが、その時ケンはもうひとつのコップを口に当て、飲むようなそぶりを見せる。ヒロは、それを見て、箱からコップを取り出し、ヒロの手と表情による支えを受けながら、コップを飲むことを選択する。ここでも、ヒロは「ゴミ収集車にお皿やお茶碗を入れて出発したい」という意図を持っていながらも、ケンの「コップで飲み物を飲み合う」という意図に寄り添っている。そのため、この流れも「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応に含まれると考える。このようなヒロのかかわりにより、ケンは再び箱に手を置いてヒロと一緒に箱を押し始める。

この事例から、「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応の特徴が見えてきた。まず、遊びの離脱を受けた他児が、動揺しながらも相手の新しい遊び文脈を探り、それを二人の遊びの中に取り入れようとする姿が見られた。この事例における「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応には、1:42の、ケンの意図を伺おうとするヒロによる観察の時間が不可欠であったように考えられる。また、一度はそれまでの遊び文脈のみに沿った行動をとったヒロ(2:02、2:10)だが、その後思い直すかのようにケンの遊び文脈を尊重するような行動を見せた。ヒロのかかわりによって二つの遊び文脈は繋がり、二人はゴミ収集車を再び出発させることができたと考えられる。

## 4 総合的考察

本研究では、1歳児クラスの子ども同士の遊び場面において、子ども同士の遊び意識にずれが生じた際の子どもの反応が、遊び関係をどう変化させるのかを明らかにすることを目的とした。

まず、遊びからの離脱に対する他児の反応に着目した結果、1-2歳児の遊びにおいては、離脱児の行動に影響されてもなお、自分たちのそれまでの遊びを持続させようと試みる姿が多く見られることが明らかになった。その試みは、物理的に離脱児を遊びへと連れ戻そうとするものや、気を引こうとするもの等、6つのカテゴリーに分類され、幼児の仲間入れ方略(藤田, 2016)よりも多様な手法を試みることが示唆された。

次に、その反応の後、それまで成立していた子どもたちの遊び関係は続いたのか、もしくは途切れたのかについて検討した結果、「物理的に連れ戻そうとする」反応、「模倣をする」反応、「気を引こうとする」反応は、離脱児を遊びに連れ戻すための働きかけとしては有効ではないことが示唆された。「言葉を用いて明示的に誘う」反応と「暗黙的に誘う」反応は、時に遊び関係を復活させることがわかったが、「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」反応のような、相手の始めた新しい遊びにおけるタイミングを見計らうような働きかけの後に、遊び関係は最も復活しやすいことが示唆された。

最後に、遊びからの離脱があったのにもかかわらず遊び関係が復活した事例について微視的に分析を行

った。【事例 1】の分析から、二つの遊び文脈を器用に行き来する子どもを支えていたのは、何度も繰り返される離脱への他児の多様で細やかな反応であったことがわかった。【事例 2】の分析から、「相手の始めた遊び文脈との融合を目指す」働きかけにおいては、相手の意図を汲み取ろうとする姿勢が重要な役割を果たしている可能性が示唆された。

本研究の結果から、1 歳児の子ども同士の遊びにおける離脱場面においては、子どもたちが様々な手法を用いた働きかけを行っていることがわかった。離脱と反応によって遊び関係が途切れてしまうものも多いが、1 歳児でも、相手とのかかわりを続けていこうとする働きかけを行うことがわかり、それらは、子どもたちの細やかなかかわりの工夫によって可能となっていることが示唆された。

今後の課題としては、2 点あげられる。まず、今回は観察期間が年度後半の 3 ヶ月のみを対象としていたため、見られた働きかけは関係性の深まりによって生まれてきたものなのかは定かではなかった。1 歳児クラス開始当初にはどのような働きかけを行っているのかを明らかにすることで、1 歳児保育における子ども同士の遊びの全体像が明らかになると考えられる。次に、今回は子どもの行為のみに着目して分析を行ったが、斎藤（2012）は、1-2 歳児において仲間が使っている物への関心の高さがかかわりを促すことを示唆している。今回遊びが続いた例として取り上げた二つの事例においても、遊びに物が登場する。子ども同士のかかわりが復活する場面における、介在する物の有無についても着目して検討する必要があると考えられる。

## 参考文献

- Corsaro, W. (1985) Friendship and social integration in peer culture. In *Friendship and peer culture in the early years*. Norwood: Ablex 121-170
- Engdahl, I. (2011) Toddler interaction during play in the Swedish preschool. *Early Child Development and Care*, 181 (10) . 1421-1439
- 藤田文 (2016) 幼児の仲間との相互作用のきっかけ－仲間入りと仲間入れに着目して－. 大分県立芸術文化短期大学研究紀要. 53. 45-58
- 布施佐代子 (1984) 乳児の社会的相互作用の研究動向－とくに仲間関係の発達の個人差を中心に－. 教育心理学研究. 32 (4) . 83-93
- 岩田恵子 (2011) 幼稚園における仲間づくり－「安心」関係から「信頼」関係を築く道筋の探究－. 保育学研究. 49 (2) . 41-51
- 木下孝司 (2008) 乳幼児期における自己と「心の理解」の発達. ナカニシヤ出版
- 古賀松香 (2011) 1 歳児保育の難しさとは何か. 保育学研究. 49 (3) . 8-19
- 厚生労働省 (2018) 保育所関連状況取りまとめ. <https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000350592.pdf> (2019/3/21 アクセス)
- 小山優子 (1998) 遊びのコンテクストとしての幼稚園；ごっこ遊びにおける幼児のコミュニケーション的行動の事例分析を通して. 幼年教育研究年報. 20. 57-64
- 松井愛奈 (2001) 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連. 教育心理学研究. 49. 285-294
- 松丸英里佳, 吉川はる奈 (2009) 3 歳児の仲間関係の形成過程に関する研究. 埼玉大学研究紀要. 58 (1) . 127-135
- 名和考浩 (2015) 保育所における保育者との相互交渉場面における 1-2 歳児の「拒否・要求・調整」行為. 愛知教育大学幼児教育研究. 18. 87-97
- 野尻裕子 (2000) 幼児にとって相手と「繋がる」ということの意味－うまく「繋がる」ことのできない 3 歳児の一事例から. 保育学研究. 38 (1) . 20-27
- 岡林典子 (2003) 生活の中の音楽的行為に関する一考察. 保育学研究. 41 (2) . 50-57
- 大桑萌 (2012) 0～2 歳児の仲間関係における模倣の役割. 保育学研究. 52 (2) . 28-38
- Parten, M. B. (1932) Social participation among pre-school children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27. 243-269

- 佐伯胖 (2017) 「子どもがケアする世界」をケアするー保育における「二人称的アプローチ」入門ー. ミネルヴァ書房
- 斎藤多江子 (2012) 1-2 歳児の仲間と物とのかかわりー「仲間と同じ物に関心をもつ」行為に着目してー. 保育学研究. 50 (2) . 6-16
- 瀬野由衣 (2010) 2-3 歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生み出すか: 相互模倣とその変化に着目した横断的観察. 保育学研究. 48 (2) . 51-62
- 瀬野由衣 (2012) 2 歳児から見えている世界. 木下孝司・加用文男・加藤義信編著. 子どもの心的世界のゆらぎと発達. ミネルヴァ書房 65-85
- 柴山真琴 (2006) 子どもエスノグラフィー入門 技法の基礎から活用まで. 新曜社
- Southgate, V., Senju, A., & Csibra, G. (2007) Action anticipation through attribution of false belief by 2-year-olds. *Psychological Science*, 18 (7) . 587-592
- 鈴木裕子 (2013) 模倣されたことから広がる子ども間の身体による相互行為ー3 歳児と4 歳児の発達の特徴を焦点としてー. 子ども社会研究. 19. 105-118
- 高櫻綾子 (2006) 幼児期の仲間関係に関する研究の動向. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 46. 259-267
- 淀川裕美 (2010) 2-3 歳児における保育集団での対話の発達的变化: 「フォーマット」の二層構造と模倣/非模倣の変化に着目して. 乳幼児教育学研究. 20. 95-107

